

わが風草



水上勉

四

只方

水上勉



わが風車^{ふうしや}

昭和五十三年七月十五日発行
昭和五十四年十二月二十五日三刷

著者 水上勉^{みなかみ つとむ}

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号一六二

振替東京四一八〇八

印刷 二光印刷株式会社

製本 神田加藤製本

定価 一〇〇〇円



© Tsutomu Minakami 1978 Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

わが風車／目次

わが風車
7

墨染
33

鷺
49

猿
71

屋根ふき利三郎
85

亀
99

世々生々
115

また、リヤカーを曳いて
137

故山
153

地藏
171

ながるる水の
185

装幀 沼野正子

わが
風車

わが
風車

1

陸橋のコンクリートの手すりに両肘をついて、橋をくぐる電車を見下ろすのが好きだった。都心へ出かける際、拾った車のたいがいここを通る。昼は昼で、夜は夜の、眺めが違って見えるのがおもしろく、時間かまわず橋のまん中で車を捨てると、降りた側の人道壁へ倚って、何げない景色を見ている。

電車はひっきりなしによごれた背中を振って走る。その背中にとりつけてある菱型枠のものを何とよぶのか知らぬが、架線のつなぎ目あたりで、よこからささえに交わるべつの架線と擦れるとき、夜だと闇の布を裂くような火花が、みじかい音をたてて閃く。すれちがう車輛が、合図に何か物をいったかとも思えた。また時には、錫いろのゼラルミンの大箱を数珠つなぎに乗せた台だけの車輛や、腰高ぐらいの板にはさまれて太い裸材が山盛りされた無蓋車などが、どうしてこんなところに一服しているのだろう、煤けた鼠いろの雪を荷の背なかにひからびさ

せて、うごかないことがあった。雪はたぶん北国のそれにちがいはなく、車輛の腹の掲示板には「わむ雪石」などと白くぬいた文字が読めたりした。かりに止まっていなくても、速度ののろい貨物は、人に乗せる電車のせわしなさにくらべて、どこやら長閑か^{のど}だった。何にしても、そこが駅でもなく、踏切でもない橋の下なのに、長い蛇体をくねらせてだまって休む貨物列車ほど、気をやすめるものはない。

左手はOデパートが線路に沿うて弓状に全身をくねらせて横たわっていた。右手は駅ビルである。同じように高い鉄筋だが、ビルはこれだけでなく、目立つものはかぞえきれない。デパートの向うは、絵はがきにもなっている超高層のホテルや、それにつづいて競って建った四つのやはり超高層のビルが、昼だとハモニカをたてたように光り、夜だとまわりに赤電球をつけて木のようにみえた。周囲がみな高いから、よけいに線路のある橋下は谷底になった。灯をともした黄色い窓。灯をともしないで蛇腹被いをおろした黒い窓。まちまちのビルが、向きも高さも争って、眠りはじめたり、眼をさましたりしている夕方近いわずかな時間のうつろいをぼくは好んでいた。ふだんは高原村にいるぼくは、都会の黄昏が短かいことに気づいていたが、空のまだほの明るいころに、そここの屋上から、酒や洗濯機の電光看板が明滅しだすけしきには格別の思いがして、眼をとらえられた。線路をはさむ東西の盛り場が、これを合図に急に熱気を出し、音楽やクラクションが、火事場の空へはじけるようにたかってくる。そうなるといままで、谷だった線路は、無数の糸をならべた川に変わり、電車も貨車も急に化粧したよう

に、赤や青にいろどられて走りだすのである。更けるにつれて、その電車も少なくなると、線路に冷えたものが這うけはいがあった。この時間も好きだった。だが何にしても、濃闇の向うへ終電車が尾灯を赤く遠ざけるけしきは、ほくだつて淋しいのだ。

この陸橋の東たもとの台地に、いつても、うしろはずり落ちるような崖なので、橋へしがみつくようにならんでいる屋台店のうち、一軒だけ馴染みがあった。女だてらに坊主頭に逆剃りして、てかてかの形いい後頭部を自慢もし、男装を好んでいる若いママが、つまみだけ出して酒を売る店だった。でこぼこの地面におかれた腰かけにすわって、一時間ほど眼の下の線路を眺めているのだが、似たような男もいて、だまって同じようにならんで線路を見ることがあった。客はさて五人もくれば満員で、カウンターに入っているママも、立ちばなしのスペースしかなく、「やかましい店でしょ。いつてることきこえやしないんだから、ほんとにさ」などといったりした。東の盛り場がまだ和田組マーケットとよばれていた頃、これは同じハモニカだったにしても、地べたに倒したような屋台の行列だった街から、数軒だけここへ移した名残りを物語っている。気に入っている理由は、名残りに吸いよせられるこっちの趣向以外にないのだが、寒い日は戸もないから、立って吞むのはいたたまれなかった。ほくがムーランルージュへ通いつめた頃にも、このあたりには、こんな店が提灯をともしていたのだった。

屋台のうしろ崖と橋つづきの高みの道路とはさまに段になった道が、土手の影にしずんでいた。石段は急で、眼下の盛り場へ通じていた。この急坂の路肩にも冬でさえ枯れない草があ

って、店の流し水などもあることゆえ、めったに乾燥したことなくじめじめして、春夏は丈高い貧乏菊がゆれていた。ほくはこんな土のある段の道が好きなのだった。昔も、ここを通って、ムーランルージュへ歩いた。

2

杉森いつ子が、まだムーランルージュの座員見習で、フィナーレの群舞に、うしろの方で、目立たぬうけ唇のしゃくれ顔を上気させて、スカートをまくりはちぎれるような太股を、肩と同時に左右へふって踊ったのはほくが上京して一年目の、昭和十三年だった気がする。東中野に住んでいたので新宿へ出るにはよく歩いたものだった。歩いてくる時は大久保の方からくるので、南口のこの陸橋の屋台のうらを降りたのは、つとめ先の九段の業界新聞からの帰りにきまっていた。記憶もいいかげんになつてはつきりせぬが、月に二回は演目が変ったか。木造建ての劇場の、後部座席の背なかにあった杭に横棒をわたした手すり、手垢で光っていたのへ、しがみつくようにして、いつ子の踊りに眼をすえていた。

いつ子は小造りな顔だちで、背低く肥っていたが、胴はよくくびれてしまり、足もふくらはぎの下から急に細まって、かわいいプロポーションだった。うぶさも買われてか、毎夜二本ある芝居の前狂言の娘役で、台詞もあるかなしかだったがよく出演した。ながいあいだほくは、

いつ子が出た芝居の梗概が印刷されている、折りたためばハガキ大ぐらいにしかないザラ紙刷りのパンフレットを、輪ゴムとじて保存していたが、敗戦後焼け野を転々しているうちに、紛失してしまった。この劇場でスターだったのは明日待子や、外崎恵美子、千石規子、池上喜代子の諸嬢だが、まだ彼女たちはみな二十代で、潑刺としていた。男優では左卜全、黒木憲三、並木瓶太郎、山口正太郎の諸氏が印象ぶかく、森繁久弥は戦後早々のころだったか。いつ子がいたころの文芸部は、菊岡久利、中江良夫の両氏あたりが中心だった。

いつ子が出た芝居に「喫殻^{すいから}往生」というのがあった。並木瓶太郎扮する失業男が、日がな喫殻を集めていて、家の縁に山もりしておく。それを娘とふたりで、手でほぐして、新品同様の紙巻タバコにつくりかえ、場末へ売りにゆく話だった。くわしい場面などわすれたけれど、セーラー服を着て、喫殻の整理をしていた、舞台センターでの膝坊主の出たいつ子には、顔は少女でも軀は一人前の、女学生らしからぬ妙な色っぽさがあふれていた。もう一つの芝居は「喜楽町十六番地」とかいう題で、ある町はずれの朝鮮人の自転車屋を舞台一面につくり、これもいつ子を娘にした並木瓶太郎が、戦時中の朝鮮人の生きにくさをほろにがく演じていた。いつ子はずまり、いつでももちよい役に出たのだが、「喜楽町十六番地」でもやはり少女ながら色気を出す特性を発揮していた。なぜ、こんなことをおぼえているかといえ、四年ほどのちに、ほくの一方的な思いが通じて同棲するようになって、子もうまれ、約六年くらした間に、よくいつ子の舞台すがたが思い出されたからだ。いつ子は幼女と妖女の同居している性格を心

得ていて、ほくに理不尽を強いる時でも、カマトトぶった甘えを手段につかつたので、あとで
ずいぶんぼくは悩んだり、まただまされてうれしかったりした。もちろん、ぼくは、いつ子が
踊り子だったころも、芝居へ出るようになったころも、ムーランルージュでは口などきもし
なかった。当時のムーランルージュの楽屋は入口に向って右側通路の奥に、出入口をもってい
て、道具などの搬入口もそこだった気がしているが、芝居がはねた十時すぎごろ、ぼくは同じ
ような若い客と連れになるでもなく、少しはなれた電柱のあたりで、いつ子が男優たちや踊り
子仲間とはなし興じながら出てくるのを気づかれぬように見送っていたものだ。一ど、いつ子
たちのあとをつけて、武蔵野館の角までいった。いつ子たちは、当時辻から右へ折れた地点に
あった高級な「亀寿司」ののれんを分けて入り、防空被いのついた電球の下で遠慮げに鉢巻き
姿の主人が迎え入れるのにこたえて、楽しげにしゃべっていた。ぼくはいつもからけつだった。
寿司屋へゆく錢もなかったから、二、三ど行きつもどりつして内側をのぞいて、東中野へ歩い
て帰った。

3

ムーランルージュが戦時娛樂統制令によって、いつ劇場を閉じたか記憶はおぼろげだ。昭和
十八年に当時これも情報局の指示で、映画会社が合同を命ぜられ、映画配給社という統制会社